

英国ならではの素材を生かした現地理解教育

前ロンドン日本人学校 教諭

熊本県阿蘇郡南小国町立りんどうヶ丘小学校 教諭 古川 忠司

キーワード：現地理解教育，現地校交流，総合的な学習の時間，教科

1. はじめに

ロンドン日本人学校は、昭和51年に小学部児童54名、中学部生徒25名の計79名で開校した小中併設校である。その後、年々増加する児童生徒のため昭和52年4月にカムデンへ、昭和62年には現在地ウェストロンドンのイーリング区アクトンへと校舎を移転した。地域環境はロンドン市内への交通至便と自然環境に恵まれていることから、落ち着いた住宅地・文教環境である。現在の校舎は、1900年（明治33年）にハバーダッシャーアスクススクールの女学校として建てられたもので、ローマ・カトリック系の学校として使用されていた築100年を超える歴史をもつ総レンガ造りの重厚なたたずまいである。周辺の住環境との調和を考えながらも日本の教育内容に適應するように増改築を行い、全天候型グラウンド、暖房完備の屋内体育館、吹き抜けのある図書館（蔵書数2万4千冊）、新型コンピュータを導入したコンピュータ教室、インタラクティブホワイトボード設置の英会話教室と、施設設備も大変充実している。

本校は、「公民（地球市民・日本国民・英国在住者）として、豊かな心を持ち、たくましく「生きる力」と基礎的資質をもつ人間の育成と自立をめざす」ことを理念とし、国際理解教育の目標を「日本の歴史や伝統文化などへの理解を深め、日本人としての自己の確立を図りながら、体験的な学習を通して異文化に対する理解を深め、異なった文化をもつ人々と協力し、共に生きていこうとする態度を育成する」こととしている。こうした目標の下に、日本と英国の認定を受けた教育施設として特色ある学校づくりをめざしており、イギリスならではの素材を取り入れた幅広い教育活動を展開している。本稿では、私がロンドン日本人学校に在籍した平成20年度～22年度に行った実践を中心に紹介したい。

2. 現地校交流における実践

- 直接、異文化に触れ、理解することのできる体験の場であり、同時に日本の文化を見つめる機会となる。
- 言葉や文化、風習などが異なる人々との触れ合いや、情報、知識の交換などを通じて、お互いを理解し合い、同じ人間としてのつながりをもつことができる。
- 英会話学習の成果を発揮できる場であり、英語の有用性を感じることができる。
- 教職員が他国の教育制度、指導方法等について学び、よい面を取り入れることができる。

という4つの意義を「現地校交流」に見出し、各学年の発達段階を考慮しながら訪問交流・来校交流という2系統で活動を行っている。

(1) 平成20年度（小学部3年生）の実践

～ドリス校、ハバーダッシャー校との交流～

両校との交流では、日本に伝わる“ソーラン節”を現代風にアレンジした創作ダンスや、文化祭で歌った日本語の歌を披露した。この時の創作ダンスがきっかけで、次年度にはハバーダッシャー校の児童も一緒に“ソーラン節”を踊るジョイントプログラムが企画され、交流すること



創作ダンスを披露する児童

となったと聞く。その他、美術や音楽、体育を中心とした相手校の授業で交流したり、習字で「友」と書いたものを貼って凧作りを行った本校の授業で交流したりすることができた。

(2) 平成21年度（小学部5年生）の実践 ～ジャーマン校，セントヴィンセンツ校との交流～

両校の交流では、日本に伝わる昔話「桃太郎」を英語に翻訳した English 紙芝居「MOMOTARO」を創作し披露した。またジャーマン校への訪問交流では、相手校の要望に応える形で日本の和太鼓を披露し、会場に集まった人々から賞賛を受けた。その他、美術や体育を中心とした相手校の授業で交流したり、メンコ作り・遊びを中心とした本校の授業で交流したりすることができた。ジャーマン校訪問時には、敷地内に保存されてある「ベルリンの壁」も見学することができ、その歴史的背景等も伺いながら印象的な交流となった。

(3) 平成22年度（小学部6年生）の実践 ～セントヴィンセンツ校，フレンチ校との交流～

両校の交流では、日本に伝わる折り紙を使った箸袋を作ったり、紋切りを使ったサンクスカードを作ったりしながら交流した。またフレンチ校の来校交流では、日本の食文化として「白玉団子」と「おにぎり」を一緒に作った。その後、フレンチ校が持参したフランスの軽食やお菓子（いずれも手作り）を一堂に並べ、食文化交流として昼食会を催すことができた。

3. ロンドンタイム（総合的な学習の時間）における実践

ロンドン日本人学校では、「英国の自然や歴史、人々の生き方などから、自ら考え、他者との共生をめざす国際性豊かな児童生徒の育成」を目標とした総合的な学習の時間（通称：ロンドンタイム）を実施している。以下、そのロンドンタイムと学校行事の関連を中心に取り組みを紹介したい。

(1) 小学部5年生の実践

① ロンドンタイム「英国のよいところ（自然・文化・名所）」

小学部5年生のロンドンタイムでは、「英国の自然やナショナルトラストの活動について理解を深め、自然環境を守るために、自分の生活を見直し、自分にできることを進んで行おうとする」児童の育成を目標に掲げている。そこで、課題把握の段階では「英国の自然・文化・名所」をイメージマップの中心に据え、個々の興味関心を基に個人課題を設定していった。次に、図書やインターネット、インタビューを中心に個人課題の解決に向けた学習を進め、最終的には「凝縮ポートフォリオ」としてまとめることができた。

② 学校行事「自然体験教室」

小学部5年生独自の学校行事として、毎年6月下旬に行われる「自然体験教室」がある。この「自然体験教室」は、「英国の自然の中で様々なアクティビティーに最後まで取り組み、英国の自然の素晴らしさに触れると共に、体を動かして活動することの楽しさを味わう」という目的の下、ロンドン日本人学校からバスで4時間程西に進んだイングランド西部のコートファームにおいて行われる。児童は、アーチェリーやシェルター（基地）作り、ドラゴンカヌー、ジップワイヤー等6つのアクティビティーに参加し、英国の自然を肌で感じながら2泊3日を過ごすのだが、ロンドンタイムとリンクさせることで「体験」から「学習」へ転換させることが容易であった。

(2) 小学部6年生の実践

① ロンドンタイム「スコットランドへの旅をつくろう」

小学部6年生のロンドンタイムでは、「スコットランドの自然や文化、歴史に興味をもち、様々な方法で調べ、まとめることができる」児童の育成を目標に掲げている。この小学部6年生のロンドンタイムは、学校行事である「修

学旅行（スコットランド方面）」を前提としたテーマであるため、「世界に一つだけのスコットランドガイドブックを作ろう」というゴールを設定し、修学旅行とリンクさせながら学習を進めていった。ガイドブックの内容は「スコットランドの歴史について」「エジンバラ城について」「テーマ別課題について」という大きな3つのテーマを設けた。更にテーマ別課題については「タータンについて」「バグパイプ、スコティッシュダンスについて」「ウィリアム・ウォレス、ロバート・ザ・ブルースについて」「スコッチウイスキーについて」「旅先の見所（フォースブリッジ、アーサーズシート、カールトンヒル）について」という5つのテーマを設定し、選択課題とした。タータンとは、いわゆるタータンチェックのことであり、400種類以上もの柄とその一つ一つには名前や意味があると言われ、その歴史や起源は学習として興味深いものがある。同様に、他のテーマ別課題それぞれがスコットランドを語る上では欠かせない文化や歴史的人物等のテーマであり、自分で調べ、見学し、まとめることは意義深いものである。

② 学校行事「修学旅行」

小学部6年生独自の学校行事として、毎年6月中旬に行われる「修学旅行」がある。この「修学旅行」は、「スコットランド地方の自然・文化・習慣に触れることにより広い視野をもち、日英相互の歴史的伝統と多様な価値観を理解し、尊重していく態度を育てる」「インタビューや買い物などを通して、日常学習をしている英語で進んで話そうとする態度を育てる」という目的の下、スコットランドを旅するものである。児童は各見学場所においてイングランドとスコットランドの歴史的な戦いについて学んだり、タータンやバグパイプ等の文化について学んだり、スコティッシュダンスを体験したり、歴史的建造物を見学したりした。またロイヤルマイルという大通りに沿ってグループ活動を行い、週3時間行われている英語活動で学んだ英語を活用しながら昼食をとったり、調べ学習を進めたりもした。ロンドンタイムと修学旅行をリンクさせながら学習を進め、修学旅行を「旅行記」としてまとめることにより、事前学習で調べていった内容と合わせることができた。正に「世界に一つだけのスコットランドガイドブック」が完成した。



スコティッシュダンス体験

4. 各教科（社会科，理科）における実践

(1) 社会科における実践Ⅰ

小学部3年生の社会科では自分たちが住んでいる地域についての学習が中心となるが、学校周辺のイーリング区探検を皮切りに、ロンドン郊外にあるローリーファーム（農場）見学やイーリング区にあるアクトンファイヤーステーション（消防署）の見学を行った。

① イーリング区探検

イーリング区探検に出かける事前学習として、方角の見方や絵地図の描き方について学習を重ねた。その後、実際に探検学習に出かけ、チューブと呼ばれる地下鉄の駅や日本食屋、公園施設を見学し、まとめの学習として大きな絵地図に表す活動を行った。こうした一連の学習の中で、英国ならではのリサイクルシステムや人に優しい環境づくり、地図記号にも触れ、思考力を伸ばしたり知識を深めたりすることができた。

② ローリーファーム（農場）見学

ローリーファームは、ロンドン郊外にある酪農を中心とした農場である。敷地規模は500ヘクタールを誇り、毎日3500リットルの牛乳を出荷するほどの大規模な農場のため、機械や施設の大きさは日本と異なるものも多かった。英国ならではの大規模農場を見学しながらも「収穫の喜び」や「農作業の苦勞」といった農業に従事する上で両国に共通するものはしっかりと学ぶことができた。

③ アクトンファイヤーステーション（消防署）見学

人々の暮らしを守る仕事について学習するために、イーリング区にあるアクトンファイヤーステーションに見学に行った。施設・設備の面では日本の消防署と類似している点が多い中、防災システムや連絡体制、消防車の構造や器具、トレーニング施設については異なる点もあり、詳しく説明を受ける中で英国のファイヤーステーションについての理解を深めていった。またポンプ車による放水体験等も行うことができた。日本の教科書を中心に据えながら英国にある環境・施設で学習を深めることは、異なる環境・文化であるが故に難しい面もあるが、実際に英国の学習素材に触れ、日本との差違を意識しながらも共通点を見出すことで、社会科の学習を十分に進めることができた。

(2) 社会科における実践Ⅱ

小学部6年生では「社会科学習の一環として、日本の国宝・重要文化財を間近で見ることから、日本の歴史への関心をさらに高める」「世界の美術品・工芸品・民族史資料に触れ、世界史に対する興味関心を高める」「現地理理解教育の一環として、英国の文化施設に触れ、そのよさを体験する」という目的の下に、ロンドン市内にある大英博物館を見学した。大英博物館には、英国に関わる展示物をはじめ、エジプトや日本の歴史に関する展示物も多い。しかし約700万点もあると言われている収蔵品を1日で回することは不可能であるため、見学のポイントを絞り、ウォーク&タイズラリー形式で学習を進めることとした。世界的に見ても貴重な収蔵品を目の当たりにすることができ、6年生で学習した社会科の内容を深めることができたと共に、中学校に進学した後の学習にも役立つ学習になったと思う。

(3) 理科における実践

小学部5年生では「理科学習の一環として、5年生で学習した内容を振り返り、体験・確認する」「現地理理解教育の一環として、英国の文化施設に触れ、そのよさを体験する」という目的の下に、ロンドン市内のサウスケンジントンにあるサイエンス・ミュージアム（科学博物館）を見学した。サイエンス・ミュージアムは5つのフロアからなり、それぞれ天文学、気象学、生化学、電磁気学等を展示している。展示物の中にはガリレオ・ガリレイの望遠鏡や世界初の蒸気機関車、グラハム・ベルによる世界初の電話等もあり、5年生で学習した内容のみならず、世界的な科学的視野を広げるためにも有効であった。

5. おわりに

英国に住み、英国の空気を吸えば英語を話せるようになる。私たちはしばしばこのような錯覚に陥るときがある。英国に住み、英国で生活をしていても、英語はもちろん、英国の自然や文化、歴史、国民性を理解することは簡単なことではない。そのような中、私が赴任したロンドン日本人学校では、各先生方が児童生徒の意欲を高める工夫を凝らし、現地校交流をはじめ多種多様な現地理理解教育が進められている。これはロンドン日本人学校へ通う児童生徒のみならず、そこに关わる私たち教師にとっても、何にも代え難い財産となることを身をもって経験した。ロンドンに滞在した3年間は、私にとって正に珠玉のような3年間であり、今後はこのロンドンで得た多くの財産を糧に、日本の学校で日本ならではの素材を生かした国際理解教育を進めたいと思う。

最後になったが、ロンドン日本人学校で現地理理解教育を進めるにあたり、多くの保護者に協力していただきながら児童生徒の安全が確保され、有意義に学習できたことに心から感謝している。併せて、私に珠玉のような3年間を与えてくださった文部科学省はじめ関係の皆様、更に本指導実践記録への寄稿という形で、ロンドン日本人学校での実践を振り返る機会を与えてくださった東京学芸大学国際教育センターの皆様へ心から深く感謝申し上げ、私の寄稿を閉じたい。